

## 市中ニ深山アリ in urbe solitudo

——吉田健一「金沢」を金沢で読んで私が発見した二、三の事柄——

上田 高弘

プレテクスト  
はじめに

一年前、やはり年度末刊行となる当紀要（第六六八号）で発表した論考「戯文ニ真理アリ in ludo veritas」<sup>①</sup>が終止感にたどり着けなくて、「続編」を予告してその場をしのいだ。そのことを記憶している読者にとって本稿は断固、「続編」でなければなるまいが、そんな御仁が多数あるとは思えない。筋や論点をチラと振り返る場面はあっても、基本的には一話完結を目指し、本稿も「続編」を名乗らない。

ただ、そのくせ一卵性双生児の名づけのようなのが、ラテン語出自の格言風を気取った論題である。それぞれの副題のいづれにも読まれる「吉田健一「金沢」」の文字列は、去年のサバティカル・イヤール（二〇一六年度）を金沢で過ごした経緯とのセットでやっと最後に本文中に登場したが——要は終止感にたどり着けないどころか序奏（堀田善衛＋キルケゴール）で終わったのである——、あらずじは失礼にも「他人の禪」<sup>ふんぜん</sup>を借りたうえ難癖を付けて返すようにして確認していた。一話完結なればこそ本稿でもその種の情報は不可欠だが、ここはテクスト外情報も含んだ概要としてその確認を考察、そのものとして始動させたい。ひとは往々にして吉田健一の創作（小説）のことをそれに記述の労を払うことは無粋な、ただ味わえば良い美食のごとく見なしてきたのであり、かかる傾向への抵抗は

言うよりまず実践するのが賢明だろうからである。

## 一 記述

### 一—一 概観——あらずじ以上の前提情報

「金沢」の初出は一九七三年（河出書房新社刊『文藝』の同年三月号「当時は月刊」、単行本も同社から同年七月刊）。ならば出来事の絶対年代を示す指標が作品中にあるわけがなし、同時代もしくはそこから見た近い過去が舞台、と書いておけば大きく外すことにはなるまい。

ただ、「近い過去」と書いて類推されるだろう範囲から、考慮に値する境界年をピンポイントで挙げるとするならば、それは一九六四年。この年の十月、東海道新幹線が開業して、とりわけ首都圏から米原経由で北陸方面との行き来に要する時間が劇的に短縮された。また、それよりも早い一九六〇年二月にも、このち吉田健一にとって年中行事となる冬の金沢旅行の最初のものが営まれる件が年譜等に読まれるのだが<sup>②</sup>、そんな情報を抜きにしても作品内のさまざまな描写がいくぶん懐旧感覚を湛えている。現に、似た原風景を脳裏に刻む一九六一年生まれの私のファーストインプレッションがそうだったが、なかでも主人公の中年男、内山<sup>③</sup>

の生業が東京・神田で営む屑鉄問屋である事実が発揮する磁力は、まさに一九七三年のオイルショックで終焉に向かう高度経済成長期の、その比較的初期のほうへと高齢読者の類推を引き寄せないではおかない。

ただ、そもそもこのリサイクルにかかわる生業が、古いと同時に新しくもあるビジネスである。だったら予断を持たぬことだ。少なくとも作者には勝る頻度（年に数回程度の割合？）で東京へ金沢を往来する主人公の行動力も、さすがに新幹線開業によってこそ可能となったものと想定するのが現実的なのかもしれない。どっちにせよ拘っても詮無い、作品の鑑賞にさほど影響を与えない議論で、現にこうした時間的要素には吉田健一自身もインクを費やさなかった。

他方、劇中人物の移動によつて生じる空間は論点を多数、宿している。こう述べる場合の基点が、寺町。——と書いた瞬間、金沢の地理に明るくない読者向けには間髪を入れず、「現在の行政区としても石川県金沢市寺町」と補注する以上に最低限の地理情報を提供、共有しておく作業が必要となる。（出来の悪い参考地図も、時代は考慮しないならば、いづれと本稿執筆時点のを、国土地理院が公開している地理院地図を活用して本稿最終頁に用意したが、後段「二探求」でルートをたどる以前はこの本文の説明だけで地図を思い描いてもらうほうが、むしろ望ましい。）

北東側に位置するものから順に浅野川、犀川、と二本の川が南東から北西の方角へと市内を流れる。それぞれの風情から女川（前者）、男川（後者）とも渾名される二本に挟まれた地帯に、県市の主要官公庁や金沢随一の歓楽街（香林坊／＼片町）を懐く中心部、そして金沢城公園とそこから内陸方向へと続く小立野の台地がある。寺町は、この市内中心部以東の丘陵地帯とは犀川を挟んだ反対（南西）側に、これまた台地として在って、だから川面を見下ろす崖の際に立てば、——上流（南東）は両白山地の山々なら川べりでも望めるが——北東は能登方面のそれほど高くない

山々までを、金沢城域や小立野台地によつてさして遮られることなく見透すことができる。

その眺望を借景できる、まさに崖沿いに、吉田健一が金沢旅行時の定宿とした料理旅館「つば甚」が現に今もある。それが作品の主人公・内山が買い求めた仮寓のモデルであるというのが定説だが、作中では、開けた眺望が担保されるかわりに表通りからは路地を行つた先に隠れるように在る、茅葺き屋根の小さな家屋に変じている。もちろん読者は騙されてはならない。形は質素でも、金沢に降り立ったのも最初は商用でだったと書きが証する程度の「内山商会」の繁盛が地方とはいえボンと札束を積んで地所を買い求めうる財を成さしめたのだし、そこでの生活全般も、以前の持ち主の代から出入りしていた骨董屋の男——屑鉄と骨董の見事すぎる対照！——の差配によつて風呂を沸かすことから爛酒の配膳に至るまで、何不自由のない支援を受けているからである。この男の、もちろん床の間に配置する軸や壺の選定のそれまでも含む何でも屋ぶりときたら、さながらポーマルシェ三部作における「床屋」のフィガロのようですらあるが、あの男みたいなお喋りからはほど遠い寡黙さで、むしろ妖精のごとき神秘性を備えてさえている。

そんな気儘な逗留の合間にフト思い立つての場合も含めて、さまざまな機縁と仕方、内山は仮寓を留守にし、広域金沢圏各所を訪れる。そうして出会った人と酒盃を傾けながら充実した交歓の時間を過ごしてはまた仮寓へと戻る、そんな往還運動のそのまた繰り返しが、六話を通してたどきの筋立てである。

ちなみに、それぞれの場所で内山を迎える相手は、第五話まででは各一名が最終的に焦点化され——以下ではその各一名に性差だけ区別した〈ホスト〉あるいは〈ホステス〉の分類名を宛てがうとしよう——、したがって交歓はいきおい対話篇の様相を呈することになる。語られる話題

は屑鉄問屋の表象との対照も鮮やかと評しうる程度に思弁的、あるいは広義に哲学的で、そこに作者、吉田健一の影を見てとらないわけにはいかないのだが、いずれにせよそんな対話篇は一転、最終第六話となるや饗宴へと変じることになる。

否、要は人数が増えたのだが、二人（対談）が三人（鼎談）になっただけでも言葉のやりとりにはどこかしら変質がもたらされるところで六人にまで話者は増えて——正確にはそれまで黒子に徹していた骨董屋もそこに加わって七人になる——、しかも内山（と骨董屋）以外の五人は、五話までの（ホスト／ホステス）たちが勢揃いしてのものときた。人を食った作法はこれに留まらない。彼らは、本来の居場所を含むそれぞれの属性におうじた渾名あだなをト書きで与えられ、以後は神のごとき作者から、まるでヨブのように呼び捨てにされる。いま、その諸属性への言及に先んじて渾名だけを紹介しておくなら、「女」（第一話）、「山奥」（第二話）、「住職」（第三話）、「フランス」（第四話）、「鶴来」（第五話）となる。律儀にそれら渾名をインデクスとして添付された、とめない会話は——したがって伝統的な饗宴譚で順序よく演説がおこなわれるのとはすでに根本的に異なっている——、最後はしかし、どの台詞が誰のものか識別するのも無意味なものとなって、さながら一枚の抽象表現主義絵画のごとく全体化する。

それにしても、第五話までと最終第六話の間、かくも劇的な跳躍があるのに世の文芸評論家の方々ときたらまるで要約不能の小説のように「金沢」を評するのは、作品を通読していないと告白しているも同然のスキヤンダルと感じられる。こうした見かけの曖昧を指して人はときに朦朧法といった語を拡張使用するのだろうか、私の見立てによれば、そうした曖昧さそれ自体が徹頭徹尾、堅固な構成意思によって貫かれており、しかも当作品の場合、この意思の達成には、書き込まれたさまざまな地

理的表象<sup>⑥</sup>が加担している。ならばこれは朦朧法というよりは攪乱法と評すべきなのに、手法は枝葉とみなされ、あるいははじめに辿ることは無粋とみなされてきた。

いかにもえらそうな物言いと聞こえようか。だが、右の苛立ちこそが動機となつて、以下で正式に仮説が語り直され、その正しきが論証される。

具体的には、まずは第五話までについてはそれら異なる訪問先のロケーション情報について過不足ない程度に（「一―二地理」）、他方そうした情報には理由あつて拘泥しない最終第六話については第五話までの（ホスト／ホステス）らがそこに到着する順序について問題提起的に（「一―三再配列」）、それぞれ適量の文字を充て、そうしてやっと仮説提示に達する。

「些末で面倒なら」ただしも、「なんのことやらさっぱり」と感じる向きさえあるのが、「二探求」の段で敢行する、ある特定の地理的表象について被写界深度を極端に浅くしておこなう論証は、読む者には苦役となるやもしれぬこの基礎作業のうえに成るほかないのである。

#### 一―二 地理——ホスト／ホステスたちの場所

第一、二話の場所は、明記されていない。冒頭——物語全体のそれでもあり個別第一話のそれでもある——では、それなりに平凡にも、主人公・内山の未婚の素性や事の経緯を説明する序奏に相当の紙幅が割かれ、終盤になつてようやく、かの往還運動の最初のものが、いわゆるはしご酒による泥酔譚として描かれる。一軒目は馴染みの、豪華すぎない料理屋で、そのような店は金沢にはいくらでもありそうだから特定しようとしても詮無い話である。ただ、そこでほろ酔い状態となつて入った二軒目の「酒場」（いわゆるバー）は、当地をそれなりに知る読者には、当時

も今も金沢一の繁華街である香林坊、片町あたり——ということには内山の仮寓がある寺町台地とは犀川を挟んだ「目と鼻の先」——だろうという印象をきつと抱かせずにはおかない。三軒目も、二軒目から遠いはずもない場所の（再び）座敷のある料理屋で、ここで、この者だけは例外的に第二話以降も「顧愷之の女」の表記で何度か神出鬼没し、第六話で最終的に「女」と呼び捨てにされる、そんな（ホステス）と出会うことになる。

この第一話と較べると、所与の地理情報はいくぶん増加するものの別の不明がつきまとうのが、第二話である。移動のきっかけは骨董屋の「斡旋」。「金沢に住む或る人」が街で内山を認め——きつと第一話でのような姿を面白がったのにちがいない——、一献交わしたいと、やはり取引があるのだろう骨董屋に申し出たのである。少々身構えながらも、むしろ胸踊らせて求めに応えることにした内山はある夜、再び犀川を対岸方向へと渡るが、骨董屋の用意した車でだから、今度の目的地はたぶん第一話ほど近場ではない。最初はわかってた道が、ランドマークとして読者にも与えられる「前田家の廟」を過ぎたあたりから迷路のようになつて、それで土地勘を失った内山は目的の場所を特定できないまま、最後は車で行かれない小道を歩いてたどり着いた屋敷で、第六話では「山奥」と呼び捨てにされることになる（ホスト）と会見する。——否、これではほとんど謁見である。

ちなみに、ここで特記すべきは、問答でも酒量でも内山が敵わないこの強者（つわもの）とひとしきり飲み語らったあと、後段で何度となく目撃するいわゆるテレポート（瞬間移動）が初めて起こることである。吉田健一の創作をしばしば幻想文学に分類させる——そのこと自体は誤っているわけではない——、その事由の一案のかもしれないこの超常現象は、たんに泥酔の別名でないとしても時間操作の謂なのではあって、だから単純な空

間的、地理的問題として論じえない契機が混入するのだが、いずれにせよこの最初のテレポート場面では二人は、右記のようにそもそも判明でない場所から、浅野川である、川の岸辺へ、と瞬時に降り立つのである。「……であろう」と書くのは、その可能性（だけ）を暗示する「これが浅野川でなくて、」の、正確にその表記で止まってしまう（ホスト）の台詞——引用符内の最後に読点を打つのは彼の読者なら皆知る吉田健一の譲れない書記法である——がそこに埋め込まれていて、それ自体は謎めいてはいるが聞き手の内山自身はともかくもそれによって我に返り、犀川べりの仮寓へと帰還するのだからである。

閑話休題。第三話では、仮寓があるのと同じ寺町に所在する、いまではすっかり観光地化した「忍者寺」こと妙立寺が、第二話の「前田家の廟」以上に明確なランドマークとして冒頭、明記される。これはまた話の導入という以上に、内山がこれから往く行程の入り口でもある。「忍者寺」の俗称の由来となる複雑な建築構造体に潜って、光が漏れ届く隧道をしばし往って川べりへとたどり着き、そこから舟に乗るが——第二話で端緒が切られた幻想性がここまでは酒の力にもテレポートにもよらずに愚直に駆動している——、地理的にみればそれは当然、周辺の犀川が変化（へんげ）したものと推量される。そのゆつたりした流れを下つていった先に「支那風」の情緒漂う館があり、そこでようやく酒がふるまわれるが、第六話で「住職」と渾名されることになるこの（ホスト）はもちろん忍者寺のそれ以外ではない。

第四話ではランドマークの明瞭は第三話以上であり、しかもそれは最初から最後まで一貫してそうなのである。すなわち、「県庁の手前の横丁を入った奥」にある馴染みの料理屋に最初、内山は在って、この主人との対話——その時点で内山が金沢に仮寓を構えて三年にはなることが明かされる——で、兼六園内にある成巽閣（せいせんかく）のことが話題に上る。いわ

ゆる名所観光には関心を寄せない内山も主人の話に興味をそそられ、たぶん日を改めてだがそこを訪れてほんの一瞬（一段落）、名物の群青色の壁を愛でたかと思えば次には、——いささか興味には欠けようが暗に明に示されている地理情報を抽出するのが目的なのだから許されよ——環状のそのうち小立野台側で緩やかにカーブする百万石通を挟んだ反対側であって「石川県庁舎石引分室」等として長く保存されてきたアレらであるう洋館へと移動する。もともと、戦前は陸軍第九師団が設計してその方面の用途で利用されていた建造物が物語中では現役の、生きられた居住空間で、その多言語を操る（ホスト）が第六話では「フランス」と呼ばれることになる。

第五、六話は、片や対話篇そして片や饗宴、と様態が異なっている件は既述だから、逆にこの時点では別視点でひとまとめにしておきたい気持ちに駆られる。つまり、この終盤の二話のいずれにおいても明確に狭義の金沢つまり金沢市からその外への遠出が敢行されるからである。先に「広域金沢圏」の表記を選んでおいた所以だが、まず第五話では、距離よりも方角の点でそれまでとは一転、犀川とは反対側が目指される。目的地は、南西は白山麓まで往つた鶴来の、今風に言えばジビエを出す料理屋で、そこでももちろん料理を、また猟師でもある主人——第六話では「鶴来」と呼ばれる——の話（いわゆる共生譚）をも内山は堪能するのだが、酔いが満足のハードルを上げたのか、白山の高い峰のほとんど頂上にまで二人はついに登りつめる。⑩といつても、もちろんここはテレポートの作用によってに決まっているが。

### 一—三 再配列——ホスト／ホステスたちがゲストに

最終第六話では内山は、おそらくは鶴来にも負けない距離にある温泉地に、その名前も明かされないまま連れて行かれる。最初、「海のほう

に向かつて走っているよう」に感じたが、そういう感覚も薄れて、いつしか山道になる。その方角が北なのか南なのかも示されておらず、特定は読者にもむずかしい。第五話が南西だから逆の北東に往つた先の、たとえば加賀温泉などを想定したい欲望にも一瞬、駆られたが、それよりも、先述のとおり第五話までの登場人物が勢揃いするのである場所はむしろ、特定されないための配慮がぞんざいに払われていると見るべきであり、そういう行き方には逆に、繊細に、応接したいのである。

ひるがえって、この第六話について確認することを予告してあったのは、この名指されない温泉地／温泉宿への、元は（ホスト／ホステス）だった者たちの（ゲスト）としての到着順である。

すなわち、最初に着いたのは内山そして、すべてを仕組んだ骨董屋で——といっても最初に言い出したのは日頃の面倒の礼を骨董屋にしたいと申し出た内山なのだが——、そのあと、誰か知人がやってくることも聞かされないうち内山が認めるのが、第二話の「山奥」である。予期せぬ再会を喜ぶのも束の間、次には第五話の「鶴来」が到着。ここまではまだ、さらに次があることを早くも予感しつつも偶然のなせる業との思いを内山は拭えないでいるが、現に「住職」（第三話）と「フランス」（第四話）の同伴到着を認めたところで、入念に計画された饗宴であることに気づく。そうして残るは第一話の「女」だけとなったが——彼女の到着はまたいつの間にかのものである——、気づくと言うなら読者こそ、戻って第二話の「山奥」の直後に第五話の「鶴来」が到着する、この再配列の作為に、そのような反応を示さねばならない。というのも、ここまでの駆け足の確認の直後であれば了解されようが——通読とは他方、長い物理的時間を要するものだ——、ひとり「鶴来」という具体的地名を与えられた第五話の（ホスト）こそが真に山奥と評すべき峰にまで内山を誘っていたのであり、その表象の直後に「山奥」と名指される別の者が

到来する設定そのものが、すでにして混乱を生じさせるからである。

小さな混乱ではないか、と？ そんなことはない。先には「どの台詞が誰のものか識別するのも無意味なものとなって…全体化する」と表現していた饗宴としての異形はこの第六話序盤、元は〈ホスト〉であった二人の〈ゲスト〉が最初に出会った瞬間に方向づけられるのだからである。

この点について吉田健一は計算ずくで、つまり私の指摘がクレームの仕儀にあたらぬ、このことの論証は長い考察の末にしか得られまいが、第二話の〈ホスト〉以上ではまだなかった者が「山奥」になる場面の五五〇文字、とくにそのト書きは、人為の一つの傍証として、そしてまた私の正式の仮説提示の導入として、この時点で一瞥を与えておく価値がある。

「…」その骨董屋が座敷の襖を少し開けてから、

「珍客がお見えになりました、」と言って金沢の山奥にあった家の主人が入って来た後から、

「ここでお泊りだとお聞きになったのだそうで、」と付け加えた。

「これは珍客、」と内山も言わずにいらなくて自分は下座に移った。それに山奥の家の主人は逆いもしないで内山がそれまでいた所に坐ると、

「あれ以来色々な人にお会いになったそうで、」と言った。それが今晩は四十位の男に見えて久し振りに話をしたそうにしているその様子から内山はまだ客があるのではないかという気がした。例えば学校の同窓会のようなものならば先に来たもの同士がそうした感じでご近寄って行くものである。内山も山奥の主人とは話したくて何故もつと前に骨董屋に頼みでもしてどこかに呼ぶとかしなかつたのだらうかと思った。併し普通ならばそれが礼儀でもあつたが相手と

過した一晚の記憶からもそれが一回限りという印象が強くてもう一度というのは前にあつたことがそのままの形でもう一度あるのを望むことであるようなことになった。又それだけにその晩が或る時あつたことは明確であり、その意味でそれは現在であつて今こうして山奥と向き合っているのが前にあつた晩の続きであつてもよかつた。もし記憶が働かなければ現在もそれが現在になることはない。

吉田健一の特徴的な文体——本稿ではまったく問題としない——が続くなか、傍点を引用者が振つておいたのは、件の者を名指す句だったが、つまり最初のから数行おきに数字ずつを減じるほほほ機械的な操作によつて、——

「金沢の山奥にあった家の主人」

「山奥の家の主人」

「山奥の主人」

「山奥」

——と約められ、こののち別の方法で呼ばれることはない。これもまた人を食つた作法だがそれは一種のユーモアと解するとして、四つの代名詞句のうち最初かつ最長のものが「金沢の」の表記付きである点<sup>⑩</sup>が、いかに重要と思われる。

この「山奥」が構える地所がどこにあるかは、特定できずにいた。そこが真にそう呼ばれるにふさわしいなら、混乱は相対的に小さくて済むが、ここまで明言を堪えてきた私の見立てによれば、それは狭義に金沢つまり金沢市内、しかもあの中心街からもほど近い場所——つまり市中央——にあつて、したがつて「金沢の山奥にあった家の主人」の表現には、逆説（皮肉）と、作為を完全に隠蔽するのではない吉田健一の小さな誠実の、両方が表れている。さらに言えば、細部に込めたこの作為は、作品

全体が目指すアレゴリー表現にとつて、きつと一種の換喩メタフィとなつてゐる。以上の見立ての正しさの論証のために、私はこの折り返し地点以降でさらに委細を尽くすことになるが、その作業に先んじて一つの小さな、言うなれば読者論的な、そんな不安をこの段階で表明しておく。それは読者、とくに金沢の地理に明るくない人がここまで付いてきてくれるだろうか、の不安である。

ときに「街小説」と呼ばれたりもする文学作品⑩にあつては、程度の差こそあれ、物語の舞台となる現実の場所の地理に暗い者と、当地に住まわぬまでもその地理に相当明るい者の、両者の間に理解の落差が発生するのは致し方ない。ましてやその細部の理解に作品受容の鍵の一つが存する、と本稿における私のように主張しようものなら、その落差の解消を期待させるのも至極当然だが、本作「金沢」についてそうした解消を目標として掲げるのは偽善者の仕儀と思われる。

あらためて明かすが、私自身が最初——まだ大学院を出たての頃——、ある種のディレッタントイズムから吉田健一最晩年の「時間」や「変化」といった長編エッセイ類から手をつけ、次に小説の代表作の一に取り組んだものの途中で挫折し、数年後に作家への関心が真に醸成してから再読するとそれなりの快速で通読できたのだったが、この二度の「金沢」体験がまず、読者の大半がそうであろうように金沢未踏の時点のものだった。それからさらに二十年近くを経て、今度は当地で三度みたび、そして四度と頁を繰ることになった者であり、この三度目以降の私の読みが次節で開示される。心が碎かれるのは、読者論が措定する種類の「理想の読者」像やそれからの懸隔のヴァリエーションの提示ではなく、さまざまにありうると言えばそうにはちがいない「特権的な読者」のうちの、細部に異様なほど反応した者の一症例を示すこと、そしてそこから作品全体を強烈に照射すること、それ以外ではない。

どこかしら置いてきぼり感を懐きながらも耐えてここまで読み進めてきている読者があれば——その存在の確認のしようがないのが不安の根本的な要因なのだが——、だから安堵し、あるいは期待し、また覚悟もしてほしい。その予兆を看取しているからこそ、あなたはここまで読み継いでいるはずだからである。

## 二 探求

### 二―一 細部——テキストの内部へ／から

今度の引用は、先にざっくり確認しておいた地理情報を作品中の実際の記載に即して検証するのだから、いささか長くなっても避けては通れない。

参考地図（二二頁）も必要に応じて利用いたたくとして——もちろんこの段となつてもなお文章だけ追っていたたくのも大歓迎である——、具体的には第二話の、約束の晩に「骨董屋が表通りに車を待たせて迎えに来た」直後から、それより先は歩くほかない地点に着くまでの、だから車でのものとなる「道順」の描写と、車を降りてから屋敷の玄関にたどり着くまで徒歩で往く描写、の二段落、約八三〇字に照明が当てられる。

それからの道順は初めのうちは内山にも解つて犀川の鉄橋を渡つて城がある方に向つて行き、城を通り過ぎて前田家の廟がある近くまで来たことは確かだったが、その辺から路次が入り乱れているようになつていの中を車が徐行し始めてまだ自分が知らない町の部分が残っているのを内山は感じた。その所帯に松その他の大木が多いのは自分の家の居間から眺めて対岸に木が茂っていること

から予想していなかったことではなかったが、それにしてもそれ程の大きさが松も加えて空を隠している様子なのはまだそこが町とは思えなかった。それでいて道の両側に崩れ掛かっていたり手入れが行き届いていたりしている土塀が続き、その所どころに寺の山門であってもいいししっかりした作りの門が土塀の単調を破って立っていた。そして街燈も付いていた。併し道に落ち葉が散り敷く上を車が進んでいるようなのがただそういう気がするだけなのかどうか内山には解らなかった。

車がしまいに止った門は他のと比べて目立たない冠木門でそこからは車は入れない狭い道が続いた。これに石が敷き詰めてあり、どこから明りが差すのか解らなかったが敷き石の落ち葉が丁度いい位の時刻にそこを掃いたことを思わせた。その両側は竹垣だった。又そこまで水の音が聞えて来て秋ならば虫の音がそれを消すのでなければならなかった。これはもの好きなものが何人が集って町の真中に深山を買い占め、或はそれを現れさせてそこに思い思いの住居を構えた感じでその一つに自分が今入って行く所と考えることでもその主人が内山の興味を惹いた。その山だか町の一部だかに住む他のもの達はただ想像して見るばかりであつてももう間もなく会うことになるのがその一人だった。別に取って食べる積りでもないだろうという奇妙な考えが内山の頭に浮んだ。そのようなことを考えるには自分が通っている両側の竹垣に挟まれた石畳の道が余りにも落ち着いた空気を漂わせていた。それも気に入って歩いて行く内山の後から骨董屋が黙って付いて来た。

文体のみならず、内山の内面が明かされる部分も無視して——ただし骨董屋の性格がよく表れた最後の三〇余文字は重要だからここまで引用

した——、そうして注視するのは、最初の段落に書き留められて早くもそれで尽きてしまう地理情報、そしてそれを補う（あるいは混乱させる？）べく第二段落まで続く景観の描写である。私自身、金沢が未踏の地であった時代には読んでも何とも思うはずもなかったが、半年ほど金沢市内しかも比較的中心部に住んで——これは二〇一六年度のサブティカル（研究休暇）での滞在が半年ほど経過した同年秋季の時点の謂れである——、地理にもそれなりに明るくなって再読したときは、寺町側から犀川大橋〔R7〕、引用中では「犀川の鉄橋」と表記）を渡ったあとは北に往き、香林坊交差点〔R5〕付近で金沢城域〔A4〕を右方向に目視してやり過ぎしたら百万石通（環状のそのうちの国道一五七号を兼ねる部分）をさらに北進して尾山神社〔P5〕、同「前田家の廟」の前を過ぎたのだから、と読んで、しかし直後の「その辺から路次が入り乱れて」以降で、急にわからなくなった。

そう、車中の内山を襲った不明感は当然、一般読者のものでもありえるわけだが、私を襲ったのはいずれとも異なるもののはずだった。まず、路地（路次）など金沢ならずとも都市であれば何処にでもある。それが迷路状態に「入り乱れて」いるとなれば、あるいはO・ヘンリー「最後の一葉」冒頭のニューヨークはワシントン・スクエア一角の描写などを引き合いに出したいところだが、「金沢」を読むのは三度目となる今や、私自身が1Kロフト付きの仮寓を借りていた長武家屋敷跡周辺〔A5〕——尾山神社からは百万石通を挟んだ反対側に位置する——やもつとJR金沢駅に近い地域にもそんな感じの路地はあった。「松その他の大木」が植わったお屋敷、寺社、史跡、…もあつたし、香林坊く片町近辺の北陸随一のビル群も無かつただろう当時は寺町からそこまで見渡せたかもしれないのだが、だとしても、合間からわずかに空が覗くほど木が茂る、鬱蒼とした風景はその付近にも、あるいは先にも、およそ思い浮かべがた

い。

あるいは告白を継いで、同じ金沢での読書経験から別の類似した迷路性の表象を挙げるとすれば、吉田健一自身が訳出にかかわったキルケゴール「酒中ニ真理アリ」の饗宴の舞台、デンマークは首都コペンハーゲン郊外の森にたたずむ屋敷の周辺の描写<sup>④</sup>もありうるのだが、それより何より、作中の描写がこののち路地的な水平性に回収できない高さを含意し始めたとき——ここでの地理的表象としては「深山」の文字が与えられている——、この方向にそんな場所はない、と醸成なったわが土地勘がつよく言い募ったのである。

そんな疑問を抱きながら読み進めてこの第二話末で出くわす、「山奥」——この時点ではそう呼ばれてはいないけれど——がレポート後の川べりで発する「これが浅野川でなくて、」の意味深長な台詞である。したがって、内山の足跡をたどることは「金沢」を金沢で読む贅沢を許された者の特権だ、と思つて買い直した文庫の頁を練つた私のこの時点での理解は、「深山」は尾山神社【P5】から浅野川河岸まで、もしくはそれを適度に過ぎたあたりまで、の間のどこか（であればどこでも良い地点）に仮構された、作者の想像力の賜物である、とするものだった。つまりこのときは、直前のレポートの水平方向の移動可能距離を考慮していなかったことになるが、そんなものを考慮に入れようが入れまいがそもそも文学Ⅱ創作、まして泉鏡花を生んだ土地の人びとが読むのなら実際の地理と多少異なるうともその想像力を歓迎したはずだった。

だが私は、この理解の根本的な誤りに、一年間の金沢住まいも終わりに近づいた頃（二〇一七年二月）、気づくことになる。

## 二二二 さらなる細部——深山のフィールドワーク

ひよっとしたらますます私小説のようになるが、方法論として確信犯

的に選んで私の発見を語るのだから、どうぞつきあってほしい。

研究計画書に書かないまでもサバティカルの目的の一つにリーズナブルな美食を掲げていた私はその日、前日に降った雪もまだわずかに残るなか、卯辰山【A2】中腹の評判の蕎麦屋【P3】を訪ね、舌鼓を打っていた。日本酒も入った赤ら顔で、ふうふう言いながらさつき登った急な坂道（子来坂）をこんどは慎重にたどり返し、下り切ったところで、往路はいつもとおり横目でちらと見ただけの宇多須神社【P1】に参ってみた。由来書に、かつて前田家の墓所であった旨が書かれていた。酔いが覚めた。

きびすを返し、下りてきたばかりの傾斜をもう一度上つてその途中の、木立が茂る向こうに浅野川方面が見えそうな宝泉寺なる寺【P2】の敷地に立ち入った。墓所と伽藍の脇を過ぎ、ほとんど眼下に浅野川河岸域を望む、切り立った高台の境内から、下方ではなく遠方を見た。金沢城域から小立野方面への丘陵地帯が、そしてさらにその向こうには寺町の大地までが、ずっと見渡せた。——ということは丘と台地の間には犀川が流れているはずだった。吉田健一の愛した「つば甚」【P8】、ひいては小説の主人公・内山が棲んだのもあのあたりかしらんと考えた。それならば向こうからもこちらが見えているに違いなかった。「その所一帯に松その他の大木が多いのは自分の家の居間から眺めて対岸に木が茂っていることから予想していなかったことではなかった」と第二話のロケーション記述の引用部分で読まれた「対岸」はこの辺まで含めていたのではないかと、と本当に松の大木の下で私は想った。

長町の仮寓に戻って、「金沢」を読み直した。都合四度目となるこのたびはPCを横に置いてである。検索窓に「吉田健一」「金沢」と打ち込んで、「浅野川」や「卯辰山」の文字列を足すと、旅や郷土史にかかわるブログはヒットするものの件の第二話に結びつく有意な記述には出会えない<sup>⑥</sup>。そのかわり有益だったのはグーグルマップだった。画面上で拡大

と縮小を繰り返し、ストリートビューで町中を自在に巡り、あるいはルート検索の世話にもなった。

最初に引用した部分のロケーション記述を思い起こした。「犀川の鉄橋を渡って城がある方に向って行き、城を通り過ぎて前田家の廟がある近くまで来た」だった。この「前田家の廟」が尾山神社【P5】ではなく宇多須神社【P1】であるなら、どうだろう。犀川大橋【R7】を渡ってからのルートに修正が生じる。具体的には、「城を通り過ぎて前田家の廟がある近くまで」往くには、香林坊交差点【R5】で、私が当初想定したようには直進するのではなく右折し、金沢城域を左手に見ながら、つまり環状の百万石通りをまずは東に、次には北に、と反時計回りで進むこととなる。細かい話になるが、もちろん広坂交差点【R6】から兼六園下【R4】までは通称「お堀通り」をショートカットする。兼六元町と大手町とを分ける逆S字カーブを南からぐるんと往けば、あとは目的地まで一キロとない。

いや、違っている！私は最初の引用中の「鉄橋」を犀川大橋と読んだが、それがそもその誤りなのではないか。否、その連想自体は金沢人にとつてすら、あるいは金沢人にとつてこそ普通の感覚だろうし、飲兵衛の内山が利用する頻度からすればなおさら妥当な推量のはずだが、このたび差配するのは何せあの骨董屋なのである。庵のモデルとされる「つば甚」から北西に行けば犀川大橋があるが、南東に行けば桜橋【R8】がある。ストリートビューによるかぎりやはり「鉄橋」らしいこの橋を渡るなら、宇多須神社のある浅野川北岸までは本多通りから先の「お堀通り」をショートカットとしてではなく直進し、兼六園下【R4】のチェックポイントを通過すれば良い。

数日後、私は「つば甚」【P8】の前に現に在った。暖簾をくぐって取材する勇氣も資力もなかったが、事件記者のように付近を歩いて、地所の

間のスリット——崖下の犀川沿いへと下りる細い坂も何本か見つかった——から、遠く卯辰山が目視できることを再確認した。東に向かい、新桜坂【R9】の美しい急傾斜から、歩むごと高さを減じる風景を愛でた。犀川大橋よりはるかに小ぶりの桜橋【R8】を初めて渡って、通りかかったタクシーをつかまえた。車中、「城を通り過ぎて前田家の廟がある近くまで」とあった部分を違和感なく読んでいたのを反省した。なぜなら金沢城域【A4】は、尾山神社【P5】ならそれを過ぎてはまだビル群に隠れているだけで右前方にあり続けるはずだったが、宇多須神社【P1】方向に向かうタクシーが大手町手前の例の逆S字カーブを曲がるともう左後方へと「過ぎ」ゆくばかりだったからである。

金沢文芸館【P4】が南西角にある橋場交差点付近でタクシーを降りた。先には浅野川大橋【R2】が架かっている。目的地がこの方角ならば、犀川大橋を渡ってわざわざ香林坊【R5】（ないし武蔵ヶ辻【R3】）を掠めて、なんていうルートはありえないと確信した。橋の上から、あらためて卯辰山【A2】を右前方に仰ぎ見た。小ぶりだが、標高百四十一メートルが低く偽ったものでないなら、せめて真下の川の表は海面とさほど変わらぬ高さ（低さ）でなければならなかった。

この日はそのまま観光客に混じって、ひがし茶屋街【A3】も初めて見てまわってから、宇多須神社【P1】を再訪した。「前田家の廟」としての地位を現在の尾山神社へと譲った、いわゆる「遷座」は、勝手に想像していたよりはるか以前の「一八七三（明治六）年——「金沢」初出のちょうど百年前！——と判明した。

神社をあとにして、「山奥」と会う前の内山のように少しく胸躍らせて次に私が向かったのは、小説中の記述に沿う、車なら「徐行」して進まねばならない道だった。私はそれを徒歩で往って、卯辰山西斜面を上る細路（路次）を見つけてはそこに入り込んで、行かれるところまで上

り、また元の場所に下っては別の細路を探して上り、を何度か繰り返した。「卯辰山山麓寺院群」【A1】として国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されているだけのことはある。例の引用中に読まれた「土塀」「山門」も随所で確認し、住居不法侵入にならない程度に「冠木門」の内側を覗き込んだりもした。大木や竹やぶに包まれた鬱蒼とした区域はいくらでもあり——時おり目撃したまるで打ち棄てられたかの光景には思わずイヤヤ書二四——二の「町には荒れすたれた所のみ残り、その門もこわされて破れた」の聖句（口語訳）が脳裏をよぎった——、かと思えば金沢卯辰山工芸工房にも程近い山道の、フト視界が開ける地点からは、都市化が進む金沢駅西側方面が眼下、かつ、遠方に見渡せた。地図情報も付加すれば、山の下には、まは金沢外環状道路（通称「山側幹線」）のトンネルが大きくカーブを描きながら貫いているはずで、そうして卯辰山全体が、——その時点では国土地理院の二等三角点「金沢」が頂上に置かれているという特殊知識がなかったのだとしても——広域、金沢圏の中心と直観された。

卯辰山西側山肌を数時間めぐり歩いて棒になった足で最後に例の子来坂の蕎麦屋【P3】にたどり着いて、ほとんど勝利の美酒にも擬えたい日本酒で舌を濡らしながら、思い返した。第二話末の浅野川河岸の記述に出会ったとき、卯辰山のことにもまったく思い至らないわけではなかったが、最初の道順の記述で、犀川を渡ったことは書いているのだけれど浅野川のことには曖昧にも出さないまま次には「前田家の廟」付近を掠めるように、言い訳がましいが、ほかでもない吉田健一が綴っていたせい、早々にその山の可能性を排除してしまっていた。しかし描写は約められていただけで——ロシア・フォルマリズム的にはむしろ認知の遅延をもたらす操作の鍵はたしかに埋め込まれてはいた「城を通り過ぎて」の句だった——、レポートならずとも早、身体が宇多須神社付近も過ぎていた

のであれば、「町の真中に深山を買い占め」の表現はもはや想像ではなくなる。

「金沢」の主人公の内山はあの晩、骨董屋に卯辰山【A2】の山腹へと誘われ、そこに館を構える粹人らの一人の（ホスト）と酒宴を営んだあと、ほとんど直下と言いたい浅野川河岸にともに降り立ったのである。

### 二—三 遠望——視座をも呑みこんで

以上が「金沢」第二話の舞台となった場所にかんする私の発見である。北陸新幹線の延伸も得て、成長止むことのない金沢は、いまやその後背にはなく中心に深山を頂いているわけだが、ここに住まう男が第六話では「山奥」と呼ばれたうえ、直前の第五話「鶴来」のものである白山絶景の表象の一部をも奪ってしまうのだから、吉田健一の作為は初出時以上の効果を現在、発揮しているのではないか。

そうした私見はさておき、ふつうならこの読みの当否を検証する段と成っていささかマゾヒスティックながらこんな反応が得られたらとの願望を先に告白してしまえばそれは、金沢の地理そして歴史に詳しい方々の口から「私は最初から分かっていたよ」風の感想が漏れ聞かれることである。むしろこれが衆目の一致するところなら私はただの道化だが、あるいは小説「金沢」そのものを読むのではなく、そこからの私の恣意的でない引用とその分析（読み、推量、現地調査）だけを読んで、「こう書かれているのならそう読むに決まっている」という反応でもありがたい。

後者の「金沢」未読者の論理的なものも含めて、判断はまだ金沢の地理がわかる人にしか開かれていないが、いずれにせよ私の発見をクルルに是認——ほとんど否認と同義だが——してくださる方々には、では浅野川にはなぜあのような謎めいた言及がなされ、卯辰山にいたってはなぜ名指されもしなかったのか——ひがし茶屋街【A3】すぐ裏手の山と書

いたら読者の興を削ぐと思つたとしても？——と問うてみる価値がある。そう、だから明言しておくが、これは読者ではなく吉田健一の、つまりは詩学（制作学）の問題なのである。

この問題の解明のために私は、一編のすぐれた吉田健一論を召喚することになる。私もそれによって最初に「金沢」を読んだ——あるいは今も一般的にはそうであろう——、長く新刊書リストに載り続ける講談社文芸文庫版『金沢・酒宴』（一九九〇）に収載される四方田犬彦による解説で、そこには吉田健一の「視座」をめぐる以下の文面が読まれる。

寺町の「つば甚」が古の<sup>いじえ</sup>前田侯幕参時の休憩所を契機として発展したことからわかるように、犀川を見下ろす視座は伝統的に武士階級によって築きあげられ、洗練されてきた。一方、浅野川はといえば、「…」どこまでも町人の低い視座を前提として愛でられ、謳われてきた川であった。このことは「…」鏡花が『義血侠血』や『化鳥』から畢生の長編『由縁の女』に至るまで、浅野川を繰り返し描きながらも、なぜか犀川に関心を寄せなかつた事実とも深く関係している。浅野川こそは貧しい母子が思いつめてじつと夜の水面に見入るのにふさわしい川であつて、そこには借景と眺望による無意識的な空間支配の欲望とはまったく無縁な、庶民的な生活感情こそが宿っていたのである。そしてこうした文脈で考えた場合、吉田健一は鏡花とは正反対に位置しているといえるだろう。『金沢』でもつぱら言及されているのは犀川、それも高所からの見晴らしのよさであつて、浅野川は不当なまでに無視されている。

基礎体力が違う、と？ 諾。文士二人を並べても、私などは先に「泉鏡花を生んだ土地の人びとが読むのなら……その想像力を歓迎したはずだ」

と軽々に親和性を語つただけだった。しかし比較文学の分野で培われた豊かな学識は二人の対照を指摘したあとさらに、「トマス・モア以来のユートピア小説の伝統」に吉田健一を定位させさえする。このマクロな<sup>パラダイム</sup>文学史観に依つて「金沢」を読むことができるのは僥倖だが——実際の示唆が私の吉田健一体験をいくぶん動機づけていると言つて過言ではない——、本稿は、被写界深度を浅くしたまま、まだしも金沢滞在累積時間と地理的関心の点で太刀打ちができるかもしれないミクロな問題に留まり続ける。

同じ解説中には、「金沢という町は、一週間でも一月でもいいが、しばらく滞在しているうちに、実に微妙で移ろいやすい雰囲気をもつていて、わかつてくるところである」の文言も読まれる。そう書く資格を獲得したのがやはり大学人としてのサブティカルによってなのか旅人としてなのかは詳らかにしないが、問うべきは、私自身は解明に委細を尽くした満足感に浸っている「前田家の廟」と「深山」を四方田が何と見立てたのか、それだけである。

ありうる第一のもの——可能性は低いと踏んでいる——は、「廟」は尾山神社【P5】で、その先で上つた「深山」は想像の産物と見なす、私が三度目に読んだとき採つた見方を四方田も採つていたというものであり、それならば浅野川への謎めいた言及にもさしたる意味はないことになり、本稿がそれへの反証となるだろう。

第二のものは、私は四度目で初めて気づいたのだけれど四方田は解説執筆時点ですぐに「廟」が宇多須神社【P1】を指すことにも気づいていて、だから「深山」も卯辰山【A2】、ついでながら寺町から見ていた「対岸」もその山一帯までを指すと読んでいた、というものである。浅野川だつて、吉田健一は内山にそれを対岸側へとたしかに渡らせたのにそれは書かず<sup>ぼか</sup>に暈したのであり、それでも／＼それゆえにこそ、「不当なまで

に無視」と四方田は書いた。この場合、私はたんに遅れてきた者であり、三十年後に採りうるのは、浅野川にたいする作者の態度に宛てる評言／表現として右は最適か、と小さく楯突くことだけである。

名指されなかった卯辰山からだ。いまや私にとつても紛れもない深山となつたその懐へと内山は招かれ、歓待されたうえ、対話のほとんど絶頂のタイミングで退去、すなわち「自身の居場所」——私は「視座」ではなく「基点」の語を選んだ——への帰還をみずから選んだ。楕円形の二つの中心間の移動にもたとえたいこの往還運動が一種、畏敬の表現となつていないはずはない。そうだとすればまた、のちに「山奥」と渾名される（ホスト）によつて符牒のように名指されただけとはいえ卯辰山と分かちがたく在つてその入口にして出口でもある浅野川にも、たしかに一種の「無視」なのだとしても「不当なまでに」の副詞句まで足した評言／表現を宛て、それで済ませて良いはずがない。

思うに一九七三年の吉田健一には、年に一度の冬のサバティカル滞在地として金沢を十余年、選び続けるなかで、定住者のものでも部外者（エトランジェ）のものでもないのはむしろ、定宿（寺町）からの遠近法的視座に満足するものでもない地歴感覚が醸成していた。そうしてついには金沢そのものを題材とする創作を手がけるに至つたとき、右のような屈折した畏敬表現にあつて、俗な表現だがいい仕事を果たしたのが、ほかでもない「前田家の廟」だつた。金沢の重要ランドマークの一つであるとしても、ちょうど一世紀前のその移動（遷座）の史実とそれによる隠し絵——いまは国指定史跡となる「加賀藩主前田家墓所」が所在する野田山墓地まで含めたら二重でも足りないが——も覚知し、つまりは理路に埋め込まれた蹟（スキャンダル）の石をも足裏で感じながら例の「道順」の行を読破できた者は、芸誌初出／単行本刊行時にそれを当地で読んだ読書人——四方田のような怪物（モンスター）級でないとしても金沢人であるだけで「理想の読者」にすでに近

い——にあつてもそう多くはなかったのではあるまいか。

「意図にかんする誤謬」の陥穽に進んで落ちたようにして書いたが、いずれにせよこの作為（意図）の一定の成功が、金沢の人による「金沢」の読みにかんする私の偽らざる推量なのであり、しかも、「ならば、いまとなつては」といくぶん挑発的に書いておきたいわけである。

あるいはこの申し開きには、初出から四十年以上が経つて金沢市街の景観もおおきく変化をとげたなかに、ほかでもない私自身が、前回（二〇〇七年度）のから数えて八年ぶりのサバティカルを利用して降り立ち、仮寓さえを構え、その意味のかぎりで特権的な読者として「金沢」を読み果せてあの細部の作為に反応した、と自己満足のオプションをさえ付け加えたいのだが、いまはもうこの点は措くならば、私を比較的最早い段階——つまり最初に通読できた二度目のトライの時点——から捉えて離さず、驚愕を与え続けてきたのが、作品の冒頭で読まれる、いわば極大の作為であり言明であり、なのであつた。

これは加賀の金沢である。

舞台は何も金沢に限る必要もないという、そんなはずはない言い訳を継いだうえ、「町を流れている犀川と浅野川の二つの川、それに挟まれていて又二つの谷間に分けられてもいるこの町という一つの丘陵地帯、又それを縫っている無数の路次というものが想像出来ればそれはそれは足りる」と、遠望によつたコンパクトな地理把握だけを読者に求める文が直後に続くのだが——「この町」すなわち金沢市街全体が「一つの丘陵地帯」と捉えられているのは新鮮である——、たしかに「この作品の舞台は加賀の金沢である」という凡庸な文がその凡庸さを隠すために変異したものでないとするれば、右の引用段落を奢つた十一文字（+句点）はど

う解すれば良いのだろう。

一文一文がやたら長く、誰が最初に言ったか「牛の涎よだれのよう」とも直喩されるその文体のコーパスのなかでも例外的に短く、それなのに日本語としても意味論的には破綻寸前のこの一文は、陳腐さをおそれずにあえて開くとすれば「この作品は加賀の金沢のアレゴリーである」となる大それた言明が、ブラックホールのようにさらに自重で収縮してそのミミママな表現となった、とても表現すべき様相を帯びている。

### 苦役と恩寵——結びにかえて

まるつきり循環的となるが——しかし全体と部分にかかわる議論はそうなるほかない——、この冒頭の異様を、地理的表象の諸細部がいつそう強烈に照射するだろうことを、私は信じて疑わぬ者だ。ただしその確信の表明にはすぐさま、現実の金沢の地理を知ろうと知るまいと冒頭の一文で意表を突かれる感性をもち合わせてさえいれば、読者は、「一つの丘陵地帯」と政治的にそれによって支配されてきた広域文化圏内を主人公の男とともに行き来し、最終話で〈ホスト／ホステス〉らが揃い踏みする光景にあの収縮なった代名詞「これ」の再膨張を見てとり、そうして一個の異形の「都市小説」の生誕に見ることができよう——私、のように、細部に囚われ過ぎることなしに、でも——、との譲歩(?)を書き足すことになる。

さすがにこのたびは終止感にたどり着く必要があるとはいえず、ここまでの数十枚の紙幅——あるいは堀田善衛とキルケゴールを出汁にした一年前の論考(序奏)さえ——を費やした者にとっては自虐的かもしれない物言いとなったが、かかる滑稽譚コメディの出来を端から見透かしているかのよう、「言葉を色々と組み合わせるものの中で小説という形式にはど

うしても馴染めない。「…」その苦役の後でどういうものを得たかと言えば別にどんなものも得なかったと考えるしかない」と書いた者こそは、小説をまだ書いて発表していなかった中期までではなく、「金沢」も少なくとも構想してはいたであろう一九七二年時点での吉田健一自身だったのである。

そうして問いは最終的に、一方に小説を読む苦役を詠嘆してみせる吉田健一がいて——しかも彼はひとが一般的に苦役と呼ぶにふさわしい読みを行使するのではないこともよく知っている——、他方にそのような細部をもつ小説を書いた吉田健一がいる、この事態をどう捉えるかというものになる。苦役の末に恩寵あづかに与った自己満足にまだ浸っている私のことはさておき、論理としてこれを矛盾としない見方は、しかし単純だ。読む者にどう受け止められようとも、ほかでもない「小説という形式」の創作物の作者として吉田健一がそこに、文字として刻まれた順で世界を記述していった、その事実に行き着けば良いからである。

### 注

① 同論考は、以下のURL(直リンク)をクリックすると、PDF形式で閲覧/ダウンロードが可能である。 <http://www.risumei.ac.jp/acd/cg/1/rb/668/668PDF/ueda.pdf>

② 吉田健一に限らずとも、東海道新幹線開業前後の首都圏と北陸地方の国鉄「当時」よる往来の件は、筆者が少しくマニアックな関心を有する鉄道ダイヤ情報まで絡めると一編の小エッセイ程度になりかねない。ここはしかし、注に注を付すような愚も避けつつ、本稿読者にとって必要最低限のものに留めて記しておく、年譜に読まれる最初の取材旅行(一九五七年)は別に記した初期の、つまり一九六〇年から右の開業の間の「年中行事」としての金沢旅行は、当時は東京駅を発って東海道本線を米原まで往ってそこから北陸本線を北上していた夜行急行「能登」を利用して——なので時間短縮にやはり一定の効果をもたらした北陸トンネルの開

通（一九六二年）も付記に値する——、その行程がすでに酒宴の様相を呈していたことが旅の同行者の一人、観世栄夫（能楽師）によって証言されている。

ちなみにこの「年中旅行」を、一部の後継の年譜が読み誤って「毎年」のものとして記載し、現在はその誤認状態のママ一般化しているのと同じく、小さない問題もあるが——というのも「金沢」初出のタイミングとなる一九七三年二月も吉田健一は金沢に行っていないと推量される重大な傍証なども複数あるとおり「毎年」ではけっしてないのだから——、この種の年譜の劣化傾向については問題指摘に留めておく。

③ 本文中に書誌情報を掲出した初出誌面では、「内山甲三」とフルネームで記載される。この初出誌面と単行本（そして現在「底本」扱いされる『吉田健一著作集』第二〇巻、一九八〇年）紙面の間で異同（改訂）は驚くほど少ないが、私見によればその最大の差が、この「甲三」の名——下の名の「寅三」だけで呼ばれる『瓦礫の中』（初出も単行本化も一九七〇年）の主人公との関連や対比にもつい関心が向かうが——が捨象されること、それにほかならない。

④ ただ、金沢および能登半島と東京の間を登場人物が往来する松本清張の推理小説『ゼロの焦点』（月刊誌初出＝一九五八年、単行本初版＝一九五九年、初映画化＝一九六一年）ではもっぱら上野発着で上越線を經由する急行「北陸」が利用されていて、物語の冒頭で「失踪」が明らかとなる新婚直後の男性登場人物、鶴原憲一に至っては、東京に本社のある某広告会社の金沢出張所勤務ということで、この行程を月に何度も行き来していた設定になっている。

⑤ ついでながら東海道新幹線開業後はこの上越線經由のルートを、注②で触れた「能登」の名を冠した急行が走り（二〇一〇年に定期運行が休止）、それが多くの鉄道ファンの記憶に留められることになる。

⑥ この料理旅館の由来については当初、そのホームページに読まれる記載を最低限、紹介しようかと考えたが、ある先行研究がきわめてコンパクトに言及するのを後段、本文中で引用することにしたので、その時点で読みたい。

なお、私自身は、吉田健一本人や観世栄夫（注②）のエッセイにでてく

る、やはり寺町の崖側にあつたとされる個人宅（日本酒「日栄」の酒造元の経営者、中村栄俊氏の邸宅）が仮寓のモデルではなかったか、と踏む者だが、看板をいまも掲げて在る「つば甚」のようにはその場所を特定できないこともあるし、本稿では定説に従っておく。

⑦ 地理といい、表象といい、それ自体は一般的な語で、本稿でも特段意識しないで使用するが、それが合成された「地理的表象」に限っては、新約聖書学の分野でドイツ語で術語化された“geographischen Vorstellungen”を意識したものである点、明記しておきたい。

具体的にはそれは、編集史的方法による新約研究の嚆矢とも位置づけられるハンス・コンツェルマン『時の中心——ルカ神学の研究』（ドイツ語原著初版＝一九五二年、同書第四版にもとづく田川建三訳＝新教出版社、一九六五年）に発するもののだが、ここは、このルカ福音書研究を批判的に援用する土屋博「マルコ福音書における地理的表象——「ガリラヤ」問題を中心として」（『オリエンツ』第九巻、第二一三号、一九六六年）中の要点を押さえた整理を、以下に紹介しておく。すなわち、——

「ルカにおいては、「荒野」(ἐρημία)、「山」(ὄρος)、「湖」(λίμνη)、「平地」(τόπος ἰσθμίου)等の言葉は、単純な地理的意味よりも、むしろ内容的意味を持っている。即ち、「荒野」は、禁欲主義者のとどまる場所として、預言者を指し示し、「山」は、祈りの場所、秘教的な顕現の場所、天上の世界との交わりの場所であり、「湖」は、イエスの力を示す顕現の場所であり、「平地」は、民衆との出会いの場所である。また、いくつかの地名は、もはや本来の地名ではなく、ルカ独自の神学をあらわすものである」。

⑧ 顧愷之は東晋時代（四〜五世紀）の中国の画家で、内山（吉田健一）が思い描いているものであろう「女史箴図」なる作品が大英博物館に収蔵されるが、それよりもここは、五人の〈ホスト／ホステス〉たちの最初がこうして例外的設定となっている件の、さらなる例外性として、（一）登場の仕方がまるでモーツァルトの歌劇「魔笛」冒頭の侍女たちのように三人でとなっていて第二話での登場時には「三人の女の一人」とわざわざ説明が付く、（二）この初出時には他の〈ホスト〉らのようにには対話が交わされない、の二点を補遺しておきたい。

⑧ ここで読まれる「県庁」は、JR金沢駅から見て海側に移転した現在の石川県庁ではもちろんなく、金沢城の南は広坂にあった旧県庁を指すが、それはさておき、作品としての本当の末尾ではこの主人だけが、「金沢で一時でも親しくした相手で普通の意味で人間」だった唯一の例外的な存在として、諧謔的に特記される。

⑨ そのうちの一つが移設され、国立近代美術館工芸館として開館したらしいニュースも最近（二〇二〇年秋）、耳にしたが、現在のコロナ禍の下では府県境をまたいで確認しに行くことも憚られるので、あくまでも「らしい」の語を添えて付記するに留めておく。

⑩ しかし、ここでの絶景の描写の大袈裟はいささか空疎なほどで、それは都市型しかも徹底的に文系人間の吉田健一のアスリート能力の欠如のゆえと私には感じられるのだが、それは失礼な、もしくは行き過ぎた見立てだろうか。

⑪ もちろん、概要確認の場面で引用していた「金沢に住む或る老人」にも同じ文字列が入っているが、これが序盤でこのように用いられるのと、第二話を現に通過したあとで謎を解くヒントのように挿入されるのでは、まったく効果が異なっている。

⑫ 都甲幸治『街小説「読みくらべ」』（立東舎、二〇二〇）というチャームングな本があつて、それにも、金沢で高等学校時代を過ごした著者の視点での吉田健一「金沢」論が含まれている。ちなみに、取り上げられる金沢以外の「街」は、ロサンゼルス、吉祥寺、福岡、国立、本郷、早稲田、ニューヨークと、いずれも著者がそこで「時を過ごした」ものに限られており、つまりそうして八つの街が選択された瞬間にすでに、同書の一定の成功と限界が約束されているのだとも言える。

⑬ いくつもの翻訳がある有名作だが、原文に含まれる“place”の訳が私はいずれも気に入らないので、件の冒頭段落だけ、意識もおおいに混じえて訳してみる。すなわち、――

「ワシントン・スクエアの西に、入ると通りが複雑に入り組み、そればかりかどれも最後は行き止まってしまふ、小さな地区があつた。行き止まりの細い街路を「ブレース」と呼ぶのは先刻ご承知のとおりだが、そんなのがさまざまな角度と曲線で絡み合うと、街はそれこそひと筋縄ではいか

なくなる。そこに目をつけたのが一人の画家だった。というのも、画材屋がやってきたつて、ここなら絵具や紙やキャンヴァスの請求書をもってぐるぐる巡るだけで、一セントも取り立てられつこないのだから！」

⑭ これは本稿冒頭で触れておいた、「本編」に当たる旧稿中で引用、論及しているものだが、一話完結と言った以上、「続編」相当の本稿にとつて有益と思われる若き吉田健一自身による訳文は、三〇〇字ほどに約めてでも、やはり再引用しておきたい。すなわち、――

「グリプスコフの森の中に、『八角路』と呼ばれてゐるところがある。どの地図にも書き示してはないのだからこれを見付けるのはなかなかやさしくはない。この名前自體が言葉として一つの矛盾である。八つの道路の交差点がどうして一つの角をつくりうるであらうか？ 又公の人のよく通る道がどうして孤立し秘められた場所ということと付合しうるであらうか？ 又もし孤独を愛する者が恐れてゐることが三叉路トリウェイに基く通俗さトリウェイアリテといふことであるならば八つの道が出合う地点とは、これほど通俗的なものはないであらう。しかしながら、矢張り八つの道路があるのだ。しかしそれにもかかはらずそこには何といふ寂けさがあることだらう」。

⑮ たとえば、いまはJR金沢駅から武蔵ヶ辻（近江町）の交差点まで、「金沢駅通り線」なる大通りがほぼ一直線に伸びている。この都市計画道路が成る平成以前、仮に一带が路地の入り乱れる区域だったのだとしても、いかにせん「深山」と表現するに値する高さには欠ける。

ところで、これは一つの顕著な例なのだが、二つあとの注⑰でもう一つ具体的な造成（都市整備）の事情に言及する以外はさしてそうした問題には頓着しておらず――わかつたように書いている百万石通だつて小立野台地側の緩やかなカーブ部分等があのように整備されたのがいつかも知ったことではない――、つまりは「金沢」初出から半世紀近くが経った程度ではびくともしない種類の地理情報に本稿は着目しているのだと、あらためて了解してもらいたい。

⑯ もちろんその後、数は多くない吉田健一論の類も渉猟して同様の結果を得たうえで、一定の自信をもって本文の表記を確定させている。

⑰ 新桜坂の「新」の文字が気になって調べた結果、それは一九七〇年五月に造成がなつたもので、それ以前はこの坂の下（清川町表記となる桜橋の

南端)と上(寺町側)の行き来には、寺町三丁目へと通じる狭隘な桜坂か、すぐ上の寺町四丁目交差点に通じる階段状の石伐坂(通称「W坂」)の、いずれかを利用する必要があった、と脱稿直前に知った。

ということは、「金沢」の時代設定が一九七〇年五月以前であれば、車で桜橋を渡る可能性はほぼ無くなり、「犀川の鉄橋」はやはり犀川大橋だということになるし、逆に言えば、——繰り返すが「金沢」初出は一九七三年三月だから——本文中の推定で問題があるわけではない、ということにもなる。

⑱ 表記されるかたちで本文は確定させたが、この行には罪のない虚偽が含まれている。すなわち、まずは例のラテン語の格言風——キルケゴールも選んだ「酒中ニ真理アリ in vino veritas」に発する——をこのたびも標題の欧語表記で気取ろうとする、そんな邪念が先にあった。「市中ニ深山アリ」を邦題とし、「IN URBE [in the city]」の二語を充てるところまで決めて、次に「深山」に相当する語を探し、いろいろ嵌め込んだりもしたのだが、どれもしつくり来なかった。そうして脱稿間際まで思索していたところでフト旧約聖書中の異なる文脈の聖句(ウルガタ訳のラテン語原文は“*relicta est in urbe solitudo et calamitas opprimet portas*”)に出会って、最後の最後に本文中の卯辰山の描写の一部にも適用することにした。私にとっても愛おしいものとなった深山そしてそこにいまも住まわれる方々への失礼とはなるまいかと一瞬、ほんとうにほんの一瞬、逡巡もしたが、“*solitudo*”の語義の広がり——深い「静けさ」の含意——からして許されるだろう、の判断にもすぐ至ったのである。

⑲ 参考地図の範囲からは外れるが、金沢城から五キロほど南に往った野田山の北側斜面にあって、歴代藩主墓とその正室や子女等の墓が約八〇基が

所在する。

⑳ 出典は、『書架記』所収の「パルマの僧院」(一九七二)だが、ここで吉田健一が標題作品をどう論じているかはさておき、同作の作者スタンダールがイタリアのパルマを舞台とする小説を手がけた事実、にかんする以下の文面の引用は、吉田健一「金沢」の理解にとっても意味がないものではないだろう。すなわち、——

「長篇の中でこれだけが舞台をイタリアに置いていることは注意していい。スタンダールはイタリアを愛し、その地に長く住んで最後には領事として在任していたチヴィタ・ヴェツキアで死んだ。我々が愛するものがそれと我々の間に或る距離を置くことは我々の心を動かしたことがその動かしただけで我々から離れた所にあることが認められるのと同じでこれが何れの場合もその対象の前に我々が無に等しくなる為であることに就ては既に触れた。スタンダールがイタリアに住んでこの地を自分の故郷と見ていたのは故郷の懐しさがこの異郷を包み、それで異郷ではない故郷とこれを懐しく思うものとの間にある距離を常に自分と自分がいる場所の間に置いていたということではなければならない。そのイタリアを小説の舞台に選んだことはその時既に一篇の物語がスタンダールの頭の中で形をなしつつあったことであり、それ故にこれを所謂、写実主義の反対と考えるものは正確な眼の働きが微妙な陰翳も見逃さないものであることを思うべきである。又それであるから写実主義は一つの影像を構成するに至ることがない」。

(本学文学部教授)

## 参考地図



上掲は、本稿執筆時点（2020年12月）で国土地理院が公開している地理院地図を活用し、本稿通読にとって有用であろう最低限の情報を、記号をもって表記したものである（記号以外は、上から浅野川、犀川となる川の名さえも省いた）。作図技術が拙いうえ、——いかに特段に考慮は払わないとはいえ——時代も隔たっていて、有効性は限られるが、地形や本文中で言及する主要街路には大きな変化がないと思われる。諒とされたい。

なお、記号は、エリアを指示するA1～A6（北から順；以下同）、ピンポイントで場所・施設を指示するP1～P9、交通の要所を指示するR1～R9、の3群に分け、それぞれを【】で括って本文に組み込んだ。また、24の記号の具体的な指示対象は、以下のとおりである。（P6、P7、P9のように、地図の参照を求めない前半「一記述」でのみ言及する例も、ここには含めている。）

【A群】：A1 = 卯辰山山麓寺院群、A2 = 卯辰山山頂付近、A3 = ひがし茶屋街、A4 = 金沢城公園、A5 = 長町武家屋敷跡周辺、A6 = 寺町

【P群】：P1 = 宇多須神社、P2 = 宝泉寺、P3 = 「子来坂の蕎麦屋」、P4 = 金沢文芸館、P5 = 尾山神社、P6 = 成巽閣、P7 = 旧「石川県庁舎石引分室」、P8 = 料理旅館「つば甚」、P9 = 「忍者寺」こと妙立寺

【R群】：R1 = JR金沢駅、R2 = 浅野川大橋、R3 = 武蔵ヶ辻（武蔵交差点）、R4 = 兼六園下、R5 = 香林坊交差点、R6 = 広坂交差点、R7 = 犀川大橋、R8 = 桜橋、R9 = 新桜坂